

紙つぶて

全村避難の福島県飯館村の菅野千恵子さんが運転する軽自動車で須賀地区の汚染土壌「仮々置き場」(仮置き場が決められず、さらに仮なのです)を見に行きました。村で除染が着手されている唯一の地域です。

原発事故による避難から二年半たつて荒れ始めている農地の中で、見渡す限り黒い大きな袋の山に埋まった谷あいには異様な景色でした。五段に積み上げられた袋の手前に、非汚染土壌の白いマークのある袋が積みまれました。そばへ行くだけで強い圧迫を感じます。仮々置き場の期限はまだ分からないそうです。

除染が終わり、さて帰って農作業をやるうとしたとき、もしこの黒い山が自分の田の隣に残っているとしたら、帰村する気持ち

汚染土壌

ちになれるでしょうか？ 除染が終われば避難生活は終了なのですが、故郷に帰れる喜びが半減する、いや恐怖に変わるのではないかと心配になりました。汚染が激しいほど、また汚染の範囲が広いほど削り取った表土は膨大な量になります。

東京五輪のためにいま、国を挙げて福島第一原発の汚染水対策が取られようとしており、それはそれとして大切ですが、農村の復興のために国がやっている事業にも、これでよいのかという疑問を持ちました。

答えは一つではないかもしれませんが。五輪関係者も含めてできるだけ多くの人が、今行われている除染の現場を見て考えることが必要だと思います。



(土器屋 由紀子＝富士山測候所を活用する会理事)